
アルカディア

青天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルカディア

【Nコード】

N1800K

【作者名】

青天

【あらすじ】

20XX年、日本はスパイによる無差別テロにより深刻な打撃を受けた。

この事件を受け設立された民間軍事企業『アルカディア』。日本政府は軍事の大半を『アルカディア』に委託し専属契約を結んだ。

『アルカディア』は人ならざる者を用い世界各地で成果を残して行った。一般人は知ることのない組織の裏の面だった。

プロローグ

20XX年、日本はスパイによる無差別テロにより深刻な打撃を受けた。

この事件を受け設立された民間軍事企業『アルカディア』。日本政府は軍事の大半を『アルカディア』に委託し専属契約を結んだ。

『アルカディア』は人ならざる者を用い世界各地で成果を残して行った。一般人は知ることのない組織の裏の面だった。

トウルルルル

「ハア、会社からか。どうせまた仕事だろうな。もしもし」

溜息を付きつつも電話に出る青年。白いシャツに黒い上着、ジーンズにミリタリーのブーツといった今風の若者。

髪は比較的長く特に左側は目を完全に隠すほどありもみあげも肩に掛かるほどある。

『もしもし、blood か。』

「はい、こちらblood。それで隊長、俺に何か用ですか？」

『用がなきゃこのクソ忙しいのに責様なんかに電話はせん。任務だ。さっさと会社に来い。』

「はいはい。分かりました。すぐ行きます。」

彼、bloodはそう言うのと携帯をポケットにしまい歩き始める。当然bloodというのは本名ではない。

コードネームである。見た目18〜20歳程度のこの男は民間軍事企業『アルカディア』の社員なのである。

「ハア、まったくハードな上に給料は少ない、労働基準法は完全無

視、上司&同僚は変人、いい加減転職しようかな。まあとりあえず行くか。」

そう言うとは彼は、黒色のバイクのような乗り物にまたがる。バイクといってもタイヤで走るものではない。特殊なシステムにより、地面から浮かび摩擦をゼロにして走ることができるのである。もちろんガソリンなど一切使っていない。レーザーと呼ばれる乗り物である。

何をエネルギーとしているかというところ、所謂魔法というやつだ。多少違うかもしれないが専門的な事はよく知らない。

ここ数十年で発達した魔法科学と呼ばれるものだ。

魔法科学とは『アルカディア』が人ならざる者の研究の過程で見つけた副産物だ。これらは今、軍関係で幅広く転用されている。

指をレーザーのモニターに押し付けると指紋を読み取らせ起動し、発進させる。

ハア、全く運がない。せつかくの休暇だというのに緊急の任務で呼び出されるなんて。

絶対、良い任務じゃない。いやな予感しかしない。

心が、身体が俺を形作る全ての要素が会社に行くことを拒否しているが、行かなければならない。

さもないとあの隊長に俺の給料、減俸にされる。それだけは防がないと。

そう思った俺はとりあえず自宅に向かう、会社に行くに当たってはそれなりの服装で行かなければならないからだ。

レーザーはかなりの速度で走れるため着くまで5分とかからない。

自宅と言っても大した家じゃあない震度三の地震で崩れさるんじゃないかと思っただろういアパートだ。今の時代では、家という家は超ハイテクだったり、何十階もある高層マンションだったりするため此処はある意味珍しい。

だが珍しいからと言ってそれ以外に特別な要素は無い。

謎の美少女が居候してたり、美人の姉がいたりなどという男なら誰しも一度は憧れる要素は皆無だ。

残念ながら俺の知り合いで女と言えば、高笑いしながら人殺しをする戦闘狂と人体実験大好きのマッドサイエンティスト、怪しい笑顔でクラッキングをする機械オタクしかいない。

どちらも会社の人間だ。確かに美人といえば美人だ。だが下手をするとなんか殺されかねない。

などと変えようのない現実に悲観しているうちにも俺の減俸へのタイムリミットが迫ってきている。急いで着替えなければ。

素早くスーツをクロゼットから取り出し、その他に必要なものを金庫から取り出す。

拳銃二丁に小型拳銃二丁、防弾チョッキあとは予備の弾薬などが入ったケースである。

拳銃はアレウス社製のアレウスV×72である。

アレウス社はここ数十年で力をつけた銃器メーカーである。本来この銃も高くて俺の買える銃じゃなかった。だがアウレス社は『アルカディア』による技術や資金の提供によって力をつけた会社である。そのため『アルカディア』の社員は安く入手することが可能なのである。

まず防弾チョッキを肌の上から着込む。この防弾チョッキは数十年前よりはるかに軽量化され、通気性も良い。にもかかわらず防弾チョッキとしての性能も格段に上がっているのである。

そしてワイシャツを着てショルダーホルスターを装着し銃を固定する。足首にはアンクルホルスターを装着し小型拳銃を固定する。

普通はこれだけ装備すれば十分かもしれないが俺は用心深い性格のためサバイバルナイフを一本ポケットに忍ばせる。銃は確かに強力が弾が切れたらおわりだ。

「よし準備万端だ。」

プロローグ（後書き）

今回登場した拳銃アレウスVx72ですがこれは作者が考えた架空の銃です。

名前はベレッタの奴を参考にしました。

作者はあまり銃とかには詳しくないので色々教えてくれるとありがたいです。

今後も架空の銃は出す予定ですのでよろしく。

第一話 任務

民間軍事企業『アルカディア』というところは入るだけでも面倒だ。まず入り口で指紋検査、網膜検査、声紋検査をうけパスワードを入力しなければならぬからだ。

この入口をくぐった後も次は受付で社員パスと合言葉の確認をしなければならぬ。

まず間違いなく新入社員はたいてい遅刻する。

俺の場合は最初の入口までは順調にいったが受付で確認する合言葉をど忘れしたため受付の呼びとめる声を無視したら警報が鳴って大変だった。

このビルは、地下も合わせて約二百フロア以上ある超高層ビルである。そのため階段やエレベーターなどを使っていたら何時までたってもたどり着けない。

そのため転移魔方陣というものがある。これは一つの部屋の床一面に書かれた魔方陣によって好きなフロアに転移できるというものだ。同時に複数人を別々の場所に転移することもできる。

「指定 地下32フロア 転移開始」

転移するにはこれだけ言えば十分だ。これだけで、最下層と最上階以外には自由に行くことができる。

基本的に地下フロアは戦闘部のオフィスや魔法科学や兵器の研究所が集中している。

理由は簡単だ。見苦しい物はすべて隠そうということだ。

この会社は世界でも数社しかない魔法科学の会社という側面も持っているため様々な企業のお偉いさんが来ることもあるし国のトップが訪れることもある。

そうしたとき戦闘部なんていう傭兵上がりのような輩やグロテスクな研究施設なんて見せられるもんじゃない。

まあそう言う俺も『見せられるもんじゃない』の一人ではあるが。

戦闘部第7分隊

これが俺の所属である。9人の隊員に一人の分隊長で構成されている。

基本、傭兵という人種はクセの強い人が多いがこの第7分隊はそのさらに上をゆく変人奇人の集まりだ。

俺はこの第7分隊におけるただ数少ない常識人である。

「やつと来たか blood、あと10秒遅かったら減俸にしようか
と思っっていたところだ。」

出た、この人物が変人共を束ねるキング・オブ・変人。赤野 あかの 京子 きょうこ
コードネーム『beast』。我らが第7分隊の隊長殿である。

一見すると見事な赤毛をポニーテールにしている美女である。ボデイラインも出るところは出て、引っこむところは引っこむそれでいて大きすぎず小さすぎず。

歳は27、独身。歳はちよつとっているがかなりの優良物件である。

けれどこんな荒くれ共を率いているだけあつて幾多の戦場を潜り抜けた猛者である。

彼女にはこんな武勇伝がある。

何でも何百という銃弾が飛びかう戦場だろうと、どんな戦場だろうと髪と顔だけには一切傷をつさせることはないとか。

何でもたった一人で100人以上もの敵を壊滅させたとか。

「それで隊長、今度はどんな任務ですか？」

毎回、毎回ハードな任務ばかりいい加減、鬱になる。

「ああ今回はとある人物の護衛だ。」

「は？どういうことですかそれ。普通そう言うのは警護部とかの仕事でしょ？なんで戦闘部にそんな任務が回ってくるんですか？」

当然の疑問である。この会社には要人警護などを仕事とした警護専

門の部隊が存在するのだ。

「これは戦闘部というより貴様個人に回ってきた任務でな。社長直々の命令で詳しいことは私も分らんのだが、どうやら警護部では手に余る事態に陥る可能性があるそうだ。」

「いまいち納得できないところが多々あるのだが社長命令ではどのみち断ることはできない。」「はあ、まあいいです。それでとある人物って言うのはだれです?」

「かみしろ神城 せつな雪那 16歳 今年から月坂高校2年生」

まったく今回の任務は意味不明な事ばかりだ。

「なんだってただの女子高生の護衛をする必要があるんですか?」

『アルカディア』の護衛を必要としたりするのは基本、国のお偉いさんとかだけだ。ただの女子高生が『アルカディア』に護衛されるなんてことはあり得ない。

「知るか。詳しいことは分らんと申した。とにかく護衛対象には気づかれるなよ。」

「気づかれるな? 普通、護衛は対象にも事情を話し対象にも十分気を張るように促すのがベストだと思うのですが。」

まあ依頼主が対象のメンタル面のも気をつかったか、対象が凶だというのなら別ですが。」

そう言うと俺は目を細め隊長の表情の変化を観察する。

隊長は僅かに眉をひそめるがその瞳に動揺の色は無い。おそらく何も聞かされていないのだろう。

「はあ、どうせ社長命令ならどうあっても断れないですね。分りました。その任務うけます。」

少しばかり不明なところが多いのが気に食わないが、俺がまだ駆け出しだったころは何の説明も無しに突然紛争地帯に放り出されたこともある。それと比べればまだマシなほうだ。

「よし、そうと決まれば話は早い。貴様には明後日から月坂高校に通ってもらおう。あとこの資料読んどけよ。お前のこれからの偽名とか色々書いてあるから。」

「はっ！？ち、ちょっと待ってください月城高校に通うって、生徒としてですか？

確かに俺の外見はせいぜい17歳か18歳ですけど、実年齢はとうに20歳超えているんですよ。今さら高校になんて、」

これは完全に予想外だ、何としても認める訳にはいかない。断固反対だ！！

「命令だ。」

目の前にあったのは第七分隊、隊長赤野 京子の最も美しく、最も恐ろしい笑顔だった。

第一話 任務（後書き）

第一話投稿完了!!!

しかしこれからはばらく更新は無い!

いつになるかも分らない!完全不定期更新です。

ちなみに京子さんはヒロインではありません。間違えないように!!!
感想くれると嬉しいです。ちょっとだけ更新が早くなります。

第二話 初登校

霧崎 悠。これが俺の月城学園に通うにあたっての偽名である。桜咲く新学期シーズンである。俺は今、月城学園の校門に立っている。校門一人立っている俺を学生達が白い眼で見ているが気にはしない。

なんだって俺が今さら高校に通わなきゃならないんだよ。確かに見た目は高校生で十分通るが実際は20歳なんかとうに過ぎている。高校だつて通つた事はないが大体は独学で学んだから問題ない。ていうか隊長怖すぎ、何だよあの笑顔。あれじゃ当分結婚は無理だな。

トウルルルルル

「ん？電話だ。もしもし」

「bloodか、私だ。貴様今、私の悪口を言ってなかったか？」
なんていう地獄耳、ていうか今、俺声に出してなくね？読心術？でも今隊長は、会社にいるはず。

「い、いや何も言ってますし、考えてもいませんよ。き、気のせいじゃないですかね。」

「ふ〜ん、まあとりあえず減俸な。」

「ハアア！？ち、ちよつと待ってください。あっクソツ切りやがった。」

「……………大変なことになった。新しい任務ということで昨日、弾薬やらなんやらに金をつぎ込んでしまった俺には今現在、金がない。とりあえず財布の確認。ひ〜ふ〜み〜367円……………終わった。」

今現在、俺は一人、廊下で立っている。先生が紹介してくれるのを待っている状態だ。

あの後、すぐに隊長に電話をしたがつながらず。結局、一か月36

7円生活が決定してしまった。このうえさらに任務に失敗して対象が怪我でもしようものなら俺は間違いなくクビにされホームレスとなるだろう。

「霧崎君、入りなさい。」

今まで高校というものに通ったことのない俺は、柄にもなく緊張してしまふ。

今さら高校生なんて嫌だと言っておきながら心のどこかでは高校生活を楽しみにしている自分もいるのだ。

新品の濃紺のブレザーに赤のネクタイ、ズボンはグレー。こういう制服を着るのも人生で初めてである。

「はい」

教室には約30人前後の生徒がいる。この中に護衛対象の神城 雪那がいるはずだ。

同じクラスなのは会社による裏工作だ。

素早く視線を走らせ対象を探す。

窓側の一番後ろ、そこに彼女はいた。雪のように白い肌、絹のようなロングの黒髪。

転校生が来るということと他の生徒が騒いでいる中ただ一人、一切も反応を示さずただ静かにこちらに視線をむけている。

クールビューティーという言葉が似合うであろう彼女はとても美しくこの教室で一際目立っていた。

「では霧崎君自己紹介を」

「霧崎 悠です。よろしく。」

もうちょっと何か言うべきなのかもしれないが一般的に自己紹介では何を言うべきなのかわからない。会社では自己紹介というと、戦闘スタイルを言ったりするのだがそれがこの場ではそれはまずいとくらい俺にも分かる。

俺の席は護衛対象の隣つまり神城 雪那の隣になった。何でもクラ

ス委員であり生徒会でもある彼女に転校生の俺の面倒を見させよう
ということらしい。

しかし席が決定したとたん男には興味無いという顔でこちらを見て
いた男子どもが素人とは思えないような殺気を放つ。

まあ俺も男、彼らの気持ちが分らんわけではない。確かに神城 雪
那は美少女だ。だが、なにもそこまでキレる必要はないと思う。

そもそも俺は彼女の護衛である。護衛が対象に手なんて出したら即
クビに決まっている。

ホームルームが終わると、生徒たちが俺の周囲に集まってきて色々
質問攻めにしてきた。その大半が女子で男子たちは隅の方で恨めし
げに俺を眺めている。

「霧崎君、私は神城 雪那。後で校内を案内するから。教室にいて。」

神城 雪那は相変わらずの無表情で眉ひとつ動かさずにそう言う
と鞆から本を取り出し読みはじめる。

「うらやましいいな」転校生。月城高校の女神こと神城さんに案内し
てもらえるなんて。

あつ俺は岩里 浩信いわりこうしんっていうんだ。ヒロって呼んでくれ。霧崎
悠だっけ？よろしくな。」

太いわけではないが、がっしりとした体つき、短い茶色に近い色
をした髪の毛、顔立ちも比較的整った、いかにもスポーツ少年とい
った風貌の少年である。

「ああよろしく、それにしてもこの男子何なんだ？神城さんの隣
って言うだけで睨んできて。」

「仕方ないさ、彼女はこの学校の三大美少女の一人なんだから。男
なら誰しも憧れるものさ。」

しかしそう言う彼は、一切俺に対して嫉妬というような感情は無い
ように見える。

「そういうお前はあんまり彼女に執着してないみたいだな、なんで

だ？」

「お、俺か？俺は、まあ何ていうか、他にいるっていうか……あゝもう！そんなことどうでもいいだろ？」

それより俺、剣道部なんだ。どうだ、悠もやらねーか？」

突然、顔を赤くして話を逸らす口。

反応からして答えを自ら言っているようなものだが、長年裏の世界にどっぷりと浸かってきた俺には彼の純粹で正直なところが好ましく思えた。

案外、高校生って言うのも楽しいかもしれないな。

第二話 初登校（後書き）

いや〜ようやくヒロイン登場！！

え？ヒロインがほんの少ししか喋ってないって？

そういう性格なんです。これからだんだん打ち解けてくるんですよ！
……ごめんなさい。作者ですら登場人物の性格をつかめて
いません。

これからしばらく更新できないと思うんで、ゆっくり考えときます。

第三話 予兆

今俺は、護衛対象である神城刹那と一緒に廊下を歩いている。彼女に学校の案内をしてもらっているのだ。

普通こういう状況では世間話など多少するものだと思うのだが彼女は終始無言である。もくてきの教室についたときだけ説明のために口を開くといったふうである。

かといって無口でおとなしい優しい雰囲気の間人では決してない、どちらかという人を寄せ付けない空気を纏った人間である。

艶のある綺麗な黒髪に雪のように白く透き通った肌、整った眉や鼻、すらりと伸びた足、そのすべてが彼女の美しさである。

彼女のクールなイメージをかし出す最も要因はその眼である、吊り上っているというわけでもなく、目が細いというわけでも無いが、その僅かにきついその眼は鋭利な印象を与えている。

まあ要約すると神城雪那はとんでもない美少女であるというわけだ。そんな美少女に校内を案内されている俺は当然、学校の男という男の嫉妬の対象であり憎むべき相手である。先ほどからすれ違う男どもが、先生までもが俺を睨んでくる。

そこまではもう案内されると決まった瞬間から分かっていた。だが神城雪那は俺の創造を超えた人気者だったらしい。

さつきから男子だけでなく女子の一部までもが睨んできている。

つまり俺は全校の7、8割程度の人間を敵に回してしまったというわけだ。

これでひっそりと俺という存在を気付かせることなく護衛をするとはかなり難しくなったといっているだろうか。なにせ転校初日ここまで目立ってしまったのだから。

どうやら今日は春休みあけということもありなんだかよくわからん先生の話はきいて後は下校となった。

そして俺は家への道を歩いているのだが、その俺の後ろをぞろぞろと物陰に隠れるようにしながら何人もの生徒がついてきている。いや厳密には俺の前を歩いている神城雪那についてきている。

神城雪那は何を思ったかふと立ち止まり、こちらを振り向く。

「何故、ついて来るの？」

突然のその言葉に自分たちの存在がばれたと思ったのか、今まで隠れていた生徒たちが蜘蛛の子が散るのようにそれぞれ隠れていた場所から飛び出てにげだす。

店の看板の影、建物の影、木の上、果てはマンホールの中などから何十人もの生徒が逃げ出す。

ちようど俺の方を向っていてその光景を見ていたため普段一切感情を表に出さない彼女にしては珍しく目が点となってしまっていた。

「……………え、えっと帰る方向が同じなんだよ。」

「……………そ、そう。」

それから俺達は何となくだが隣に並んで帰っていた、とはいえ何も話すことなどなく、学校を案内されていた時の再現となっている。

「ねえお嬢ちゃん一緒にどっか遊びに行かない？」

耳障りな猫撫で声が聞こえ横を向くと案の定、神城雪那が三人組みの男に声を掛けられていた。

それぞれ髪を染めていたり、ピアスをジャラジャラつけていたりとアホ丸出しの男たちであった。

しかし悲しい事にこういつた男はどこにでもいる。以前隊長と一緒に任務で米軍のサポートに行った時もこんな感じの男が隊長に手を出して文字通り八つ裂きにされていた。

一瞬こういう馬鹿どもからも守ることは任務に入るのだろうかとも考えたが任務云々以前にここで助けなかつたら男としていかなものだろうと思いなおし、男と神城雪那との間に割って入る。

「おい、やめろ。」

「あゝん。やんのかクソガキ。男にゃ興味ねえんだよ。」

そう言うと男たちは拳を向けて殴りかかってくる。
しかし所詮は素人、俺にとっては脅威にはなりえない。
半歩下がり最小限の動きでかわすと相手の拳を振るった勢いを利用してそのまま地面に叩きつける。
後ろから殴りかかってきた相手も同じようにして倒す。
ほんの一瞬で二人の男を汗一つかくことなく倒し終える。

「ウガアアアアアアッ！！」

突如男たちの中で最も体格の大きかった男が獣のような雄叫びをあげ上から押しつぶすように拳を振るう。

「なっ！？」

咄嗟に回避したもののそのままアスファルトの地面へと叩きつけられた拳はなぜかかすり傷一つなく、逆に地面はクレーターのよう陥没してしまっていた。

明らかに人間を逸脱した腕力である。さすがの俺もこれには驚く。
こんな一撃をうけたら、骨折どころでは済まされない。

男は完全に白目をむき口からは涎を垂らし明らかに意識が無いか発狂している異常な状態である。

「霧崎君この人いったいどうしたの？」

さすがの彼女もあまりの男の様子の変化に恐怖を覚えたのかその声は震えている。

「さあ？きつと薬でもやっつてたんじゃないの。」

軽口を叩きながらも次々と振り下ろされる拳をバックステップで回避する。

躲された拳は次々と地面にクレーターをつくりあげていく。

長い間、戦場で戦ってきた俺は薬を使って理性を飛ばして向かってくる兵士や仲間を殺され正気を失った人間など腐るほど見てきた、しかしこんな化け物じみた力を持った人間は見たことがない。

いや見たことはある。しかしアレらはこんなところに姿を現すはずがない。第一この男はさっきまではただの一般人だったはずだ。

次の瞬間今までよりも大きく腕を振り上げ、強烈な一撃を振るってくる。

「ちっ」

軽く舌打ちすると大きく後ろに跳びかわす。

その瞬間だった男は素早く神城雪那の方を向く。

さっきの攻撃は俺に距離をとらせるためだったのだ。あいつは初めから神城雪那を狙っていたのだ。

「クソツ、させるかっ！」

俺は着地すると同時に左足で強く地面を蹴り一瞬で間合いを詰めると勢いのまま男の顔面を左手で鷲掴みにし、そのまま男の巨体を地面に叩きつける。

ドガアア！

男は後頭部を強打し動かなくなる。

「ハア、ハア。大丈夫だった？」

「ええ、私は大丈夫。それより霧崎君の方こそ大丈夫なの？」

相変わらず神城雪那は無表情だったが彼女の瞳はわずかに安堵に潤んでいるように見えた。

表情以上に瞳は彼女の思いを代弁していた。

「ああ、これくらい問題ないって。」

第三話 予兆（後書き）

前回、更新は無理と言いましたが何とか書けました。

今月中に後一話くらいなら書けそうです。

感想ください。批評、アドバイス等もぜひ下さい。今後の参考にしたいと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1800k/>

アルカディア

2010年11月18日10時59分発行